

和田春樹 (わだ はるき)

1938年生まれ。ロシア史、現代朝鮮研究。東京大学名誉教授、東北大学東北アジア研究センター客員教授。

著書：『日本・韓国・北朝鮮——東北アジアに生きる』（青丘文化社）、『朝鮮戦争全史』（岩波書店）、『北方領土問題——歴史と未来』（朝日新聞社）、『北朝鮮——遊撃隊国家の現在』（岩波書店）、『金日成と満州抗日戦争』（平凡社）、『歴史としての野坂参三』（平凡社）、『歴史としての社会主義』（岩波書店）など。

新地域主義宣言 東北アジア共同の家

発行日 2003年 8月18日 初版第1刷

著者 和田春樹

発行者 下中直人

発行所 株式会社平凡社

〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4

電話 (03)3818-0741 [編集]

(03)3818-0874 [営業]

振替 00180-0-29639

ホームページ <http://www.heibonsha.co.jp/>

印刷 星野精版印刷株式会社

栗田印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

ISBN4-582-70244-9

NDC 分類番号310.4 四六判 (19.4cm) 総ページ272

© Haruki Wada 2003 Printed in Japan

乱丁・落丁本のお取替えは直接小社読者サービス係までお送り下さい (送料は小社で負担します)。

東北アジア 共同の家

新地域主義宣言

和田春樹



平凡社

ところで、私が台湾のシンポジウムに向かった三月二日、衆議院の憲法調査会で、姜尚中氏が参考人として招かれ、「北東アジア共同の家」について意見陳述をおこなった。在日韓国人の知識人が国会に乗り込んで、国会議員たちに「二一世紀のあるべき姿の日本」のビジョンとして東北アジアの「共同の家」構想の検討を提案したというのは、画期的であり、一つの事件と呼ぶべきことである。

姜氏は円の国際化、アジア的な基軸通貨化によってアジアの通貨の安定をはかるためには、どうしたらいいか、と問いかけ、そのためには金融機関の不良債権の処理と経済構造の改革による輸入大国化が必要だと切り出した。さらにナショナリズムという魔物を抑え込むことが必要だとしたうえで、重層的な労働人口の移動を日本も受け入れること、日韓関係を独仏関係と同じような関係にすることが必要だとし、情報ハイウェー構想、玄界灘の海底トンネル案にも言及した。そこから外交安保問題に進み、日米の「ゆがんだ主従関係」を清算し、「対等なパートナーシップ」をつくり出すためにも、日韓の「非常に強力なパートナーシップ」の形成が必要だと主張した。それとの関連で、周辺四国による「朝鮮半島永世中立化論」を提示し、北朝鮮の緊張の緩和、内部からの変化のために日朝交渉を推進し、2プラス2プラス2の六カ国平和会議を開いて「北東アジアの集団的安全保障システム」をつくるが必要だと強調した。最後にこの構想は、米中の覇権競争に日本がどういうスタンスをもって臨むかということに関連していることを述べ、日本が多民族、多文化的な社会に変わることが必要だと結んでいる。

国会の記録をみると、各党の議員たちは姜氏のこの陳述に一樣にかなりの関心を示し、姜氏の言葉に耳を傾けている。これは希望を与える事態である。姜氏の憲法調査会での意見陳述は、のちに氏の著書『東北アジア共同の家をめざして』（平凡社、二〇〇一年一月刊）に収録された。

本を出す段階で、「北東アジア」が「東北アジア」に言い換えられることになったのは、「東北アジア」派の私としては喜ばしいことであった。

東アジア共同体か、東北アジア共同の家か

ところで、この二〇〇一年は、「東アジア共同体」という構想が現実の動きとして登場してきた年であった。これより先、国際政治学者の田中明彦氏が二〇〇〇年六月に『中央公論』に「新しい東アジアの形成」なる論文を発表したことがあった。田中氏は一九九九年にASEANプラス3の会議で設置された東アジア・ビジョン・グループに日本から参加しているメンバーの一人であった。この論文は二〇〇〇年一月に出た同氏の著書『ワード・ポリティクス——グローバルゼーションの中の日本外交』に収められていた。

そして二〇〇一年一月には、岩波書店より森嶋通夫氏の新著『日本にできることは何か——東アジア共同体を提案する』が刊行された。これは一九九七年に森嶋氏が中国の南開大学で講義をした内容に加筆したものである。森嶋氏は、こんどは、中国、南北朝鮮、日本、台湾が共同体をつくるべきだという考えを述べたが、それを「東アジア共同体」と最終的に呼ぶことにしたのである。この本では、東アジア諸国の敵対関係、日本の侵略の問題が自覚されており、それを乗り越えて、まず経済共同体からはじめて、共同社会的利益社会になることが構想されている。森

断してモスクワ経由でヨーロッパに入ることができるようになるのである。盧武鉉大統領はこのルートに夢をのせて、「鉄のシルクロード」構想を立てている（盧武鉉『韓国の希望 盧武鉉の夢』現代書館、二〇〇二年）。

以上は、すべて大陸部分の輸送回廊であるが、日本とは当面は船舶で結ばなければならない。釜山と下関を海底トンネルで結ぶという構想もある。いまだ現実的ではないが、英仏間の海底トンネルの存在を思えば、将来的には考えられることかもしれない。

「北東アジア輸送回廊ビジョン」の提案者は、九本すべてが将来この地域の発展のために不可欠であると指摘し、鉄道、トラック用道路の不連続点が存在することを早急に克服すること、在来線の拡充、鉄道と長距離道路の併設を進めることなどを提案している（「北東アジア輸送回廊ビジョン」ERINAブックレット、第一巻、二〇〇二年）。

このような輸送回廊の整備は、東北アジア経済共同体の重要な柱の一つである。

経済的成長の面では、中国を中心に、ロシア、北朝鮮、モンゴルがいつその成長を志向して進むのであるが、日本、韓国、台湾はすでに成長をとげ、成長の矛盾も十分にみた国々として異なった問題をかかえている。二つのグループが助け合うことで、有意義な経済共同体をつくることのでまれる。

⑨朝鮮東部輸送回廊（釜山―羅津・先鋒―ハサン―ウスリースク―シベリア鉄道）

このうち、①はロシアのバイカル―アムール（BAM）鉄道、②は本来のシベリア鉄道、③はロシアが満州につくった東清鉄道、中東鉄道であり、既存線である。④は図們江開発計画と結びついた輸送回廊で、図們江地域で鉄道が切れていたのがつながられたのである。中国側鉄道が標準軌であるのに、ロシア側の鉄道は広軌だから、従来連絡がなかった。そこで琿春―クラスキノ（琿春の東南にあるロシア領）間に標準軌と広軌の複線を敷くことがおこなわれ、二〇〇〇年二月には運転を開始した。⑤は大連―ハルビンという旧南満州鉄道である。それが北の北安にまで伸びているのをさらにのばしてアムール河を越え、シベリア鉄道につなぐという案である。アムール河にかかる鉄橋の建設が見込まれている。⑥はモンゴルを中国、ロシアと結ぶ重要な鉄道だが、モンゴルがロシア式の広軌であるため、エレンホトで客車は台車交換、貨車は積み替えをおこなっている。⑦は現在は東アジアと中央アジアを結ぶ鉄道として機能しているが、将来的には東北アジアをカザフスタン経由でヨーロッパと結ぶ第二の幹線としてシベリア鉄道に並ぶ地位を占めると予想されている。

⑧と⑨は、南北朝鮮の鉄道連結によって開かれる輸送回廊である。ともに二〇〇三年六月一日に連結式が行なわれた。もう少し残った未建設部分を建設すると開通になるはこびである。そうなれば釜山から新義州に北上し、満州を横切ってロシアのシベリア鉄道に入り、シベリアを横